

生物多様性 × 環境教育

香坂 玲 (こうさかりょう)

東京大学農学生命科学研究科教授。2008～2010年度まで、愛知県名古屋で開催されたCOP10の支援実行委員会アドバイザーを務める。国連大学高等研究所の客員研究員として里山の評価などにも参画し、財団法人地球環境戦略研究機関 (IGES) フェロー、WWF ジャパン自然保護委員会なども兼務。



生物多様性の損失を止め、回復軌道に乗せる「ネイチャー・ポジティブ」の実現のために、環境教育は、どんな役割を担えるのでしょうか。

2024年夏号・冬号の2回に渡り、生物多様性など地球環境と、風土・地域での人々の営み・文化を専門に研究されている香坂さんに、お話を伺います。

環境問題を どのように伝えるか

気候変動や生物多様性といった地球規模の環境問題について、どのように伝えていけば、より多くの人とともに考えていけるのか。環境教育の現場の中での、古くて新しい問いです。

気候変動であれば、夏場の暑さといった異常気象や自然災害の頻度などで、「実感を持つ」「納

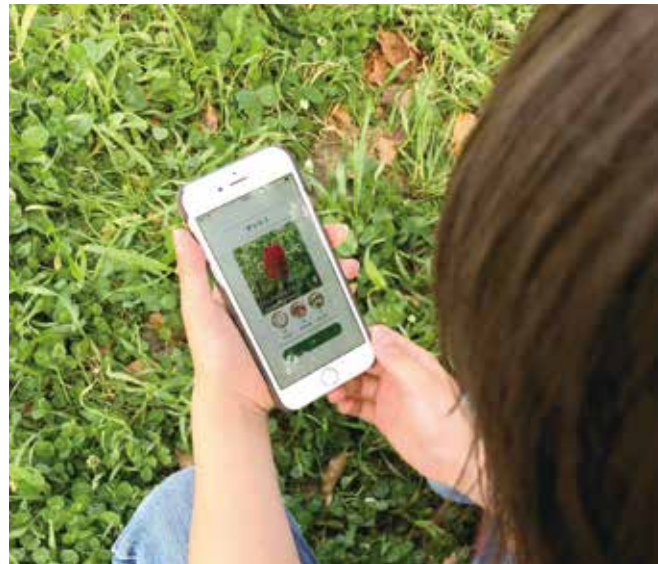
得する、腑に落ちる」ような伝え方はしやすいのですが、生物多様性の損失や危機については、なかなか実感を持ちづらい側面があります。

そこで、例えば話を聞いて、生物多様性の損失について伝えようとすることもあり、「まだ読んだことがない書籍が入っている図書館が燃えるようなもの」「パラパラと部品が落ちていく飛行機で全体のシステムとしてはいつか落下という危機に」といった表現で、問題の規模や緊急性は

伝わりやすくなるでしょう。その一方で、その規模や重大さから、かえって「自分たちが何をしていっても変わらないのではないか」という無力感や諦めにつながってしまう危険性もあります。

人々が楽しみながら 参加できる科学の役割

このような状況の中、人々が現場で参加する、あるいは自ら作り上げていく、自分達でアクションを展開していくことを目指す環境教育の役割は大きく



アプリ「Biome」を使った自然観察 (株式会社バイオーム提供)



いきものコレクションアプリ
Biome



スマートフォンを用いた韓国での市民科学の展開
(Yikweon Jang 教授提供)

なっています。

例えば、市民が科学者と協働し、気候変動による生物の変化などの現場情報の収集・分析やモニタリングに参画・協創するよ
うな活動として、市民科学・シ
ズンサイエンスが注目されつつ
あります。植物分類学の牧野富
太郎の活動が、それに該当をす
るとも言われています。

市民科学・シズンサイエンス
は、市民に対する普及・啓発の
側面だけではなく、日本学術会
議の若手アカデミーの報告書に
あるように、データの創出や、

科学の新たな在り方にまでその
裾野を広げつつあります。これま
では研究者だけのものであった科
学の活動が、広く行きわたって
く可能性があるので。

また、環境問題の話を伝える
際、どうしても講義っぽさや「説
教」の色彩が強まってしまいうこ
ともあります。人々が広く参加
できるよう「楽しみながら環境
保全や環境教育ができないだろ
うか」という試みとして、活動
のゲーム化、ゲミフィケーション
(Gamification)とい
うものがあります。元々環境教
育でも活用されてきた手法では
ありますが、携帯電話の普及・
活用によって、その裾野はさら
に広がっています。

例えば、生物多様性であれば、
市民科学とゲミフィケーションの
強みを組み合わせた無料アプリ
があります。株式会社バイオー
ムでは、ポケモンGOでキャラク
ターを収集するように、実物の

生き物の情報を収集するアプリ

「Biome」を開発・提供し
ています。例えば、ある人がセミ
の抜け殻を見つけ、それを撮影
して投稿します。すると、撮影
した位置や時期の情報がデータ
ベースに登録され、その情報は、
生息範囲の推移(例えば、クマ
ゼミが北上しているかどうか)の
分析に活用できます。人々がア
プリを活用し、堅苦しくならず、
楽しみながら多様な生き物の情
報を収集する中で集まったデー
タが、生き物の基盤情報として
も活用されるのです。長期的に
継続できれば、市民が収集した
データから、地球温暖化や気候
変動の生物への影響が見えてく
る可能性もあります。

より多くの人とともに、 生物多様性を実現する ために

さて、本誌の2023年冬
号に掲載された「2030生

物多様性枠組実現日本会議
ネイチャーポジティブ宣言と
JEEFの取り組み」の中で、
JEEFの加藤超次氏が、国際
情勢と合わせて、JEEFの今
後の取り組みを紹介していまし
た。これからは生物多様性×環
境教育について学ぶ機会や場を
創出するとしており、生物多様
性への取り組みは、より一層、具
体的に行動していく段階になつて
いきます。

「体験と対話を重視した環
境教育」によってネイチャーポジ
ティブの達成に貢献する」とい
う目標のなか、いかに「市民が
参加し、楽しみながら実践でき
るのか」という点に、生物多様
性×環境教育の成否はかかつて
くるでしょう。その際に、市民
科学やゲミフィケーションは大き
なキーワードとなりそうです。



『地球のこども』2023年冬号